

下野市産業振興計画策定委員会（第3回）

会議要録

【開催日時】 平成26年10月29日（金） 午後1時30分～午後15時45分

【開催場所】 南河内公民館会議室

【出欠】 出席委員：9名（内、公募市民1名、オブザーバー：1名）、欠席委員6名。
事務局：4名、コンサル：2名。

【傍聴者数】 0名

【配布資料】

- 1 下野市産業振興計画〈骨子案〉（p1＝資料1）
- 2 課題の産業別まとめ（p2＝資料2）
- 3 第4章資料（p3＝資料3）
- 4 第5章資料（p4＝資料4－1）
- 5 第5章資料（p5＝資料4－2）

【議事】

1 開会

2 あいさつ

委員長より、本日は計画の骨子案をご議論いただき、その内容が計画案に反映されますので、ぜひ委員の皆さまから忌憚なきご意見を頂戴したいとのあいさつがあった。

3 議事

（1）下野市産業振興計画骨子案について

① 第1章から第4章について

○コンサルが資料1～3を説明

（委員長）

骨子案の内容が5年後には盛り込まれているということになるが、イメージはいかがですか。

- ・振興計画というのは、通常、10年先を見越して当面の5年間の計画をつくるものなのですか。

（事務局）

総合計画は10年計画で5年毎にスパンを区切ってやっているものが多く、個別計画になると5年計画であるため、“10年先を見据えての”というのはあまりないと思われる。

（委員）

- ・p2【課題の産業別まとめ】の「2.商業サービス等」について、現在、商店街は後継者等の問題があり更地が多くなっており、商工会も脱退する人が増えている傾向にある。「ア.駅前等主な市街地に商業・サービス業を集積させること」は個人では不可能に近い。空き店舗対策を現在行っているが、離れたところにぽつんぽつんとある空き

店舗だとあまり長続きせず、集積させることが絶対条件なのだと思うので、行政はそれを踏まえて指導やバックアップを重点的にお願いしたい。

(委員長)

宇都宮のオリオン通りの空き店舗対策を手伝った際に、市より“学生に動いてもらおう”という提案をいただいたが、日本の学生はやる気がなく、代わりに海外からの留学生が手を挙げてくれたこと、市役所から補助があった1年間はそれなりに活気があったが補助がなくなると個人ではどうしようもなかったこと、最近になってオリオン通りを訪れたが、相変わらず空き店舗が目立つ状態であったことから、やはり行政のリーダーシップが必要なのではないか。

(委員)

- ・ p 3の図にあるような集積スポットができるともっと活性化すると思う。

(委員長)

- ・ p 3の集積スポットの図のような試みは、なにか先行事例があるのか。

(コンサル)

パティオ事業でこのようにしたところはたくさんあるが、ただし、規模が大きく、商店街としてやっているところが多い。ここで挙げているのはもっと小規模の取り組み、例えば地主の相続等の問題で所有者のいない土地ができる場合があるが、その際うまく対応するための方法であり、そして、それは行政よりも、むしろ不動産業や建設業の皆さんが提案をして、取り組んではどうかと考えている。

具体的には、大きな土地ができると分譲してしまうのが実情であるが、単に売りやすいから住宅地にするというのではなく、そこにお店もやれるようなものを考えてみたり、元気なお店を誘致してテナントに入れることを提案してみたりと、p 2の4. 建設業の「ア. 建設業と不動産業等の連携で取り組む体制づくり」をしたほうがよいということであり、行政がすべて用意してもうまくいかないと考えている。

(事務局)

下野市では、空き店舗対策は年間60万円を限度として家賃補助を実施しており、8月末までに当局が調べた内容では、旧3町毎ではあるが、石橋に約50店舗、南河内が15～20店舗、旧国分寺が15店舗の空き店舗がある。

(委員)

- ・ 今は、インターネットで産地直送と同様に食品を購入出来るようになるなど、宅配方法が変化しているので、今までのあり方と同様のものをつくっても、それ自体の魅力で集客できる期間が非常に短くなってきている。

(コンサル)

p 3の図では、人口密度が低くなることによってお店が成り立たないということも考慮し、同じスポットの中に、サービス付き高齢者住宅やケアハウス、コミュニティカフェも一緒に入れている。また、今までの空き店舗のようにぼつぼつある空き店舗を救うのでは補助金がある間しか成り立たないため、そうでないものを「健やかライフ」の町と

しては目指したい。

(委員)

- ・ある程度若者が行ってみたいと感じる所をつくったほうが、長い目でみれば労働力不足の解消につながる可能性もあり、よいのではないか。
- ・地域の人々が思い思いの意見を出し合い、町の設計を皆で行っている町の様子が紹介され、それを踏まえ、今の社会は個が大事にされているために交流が少なくなっている。また、p 3 下図のように様々な人々が、施設に行ったり買い物に行ったり、自然に集まれる環境はとてもいいと思う。

(委員長)

前回会議で企業城下町をイメージして計画を立てたほうがよいと述べた委員さんがおり、私なりに考えたが、自治医大を富士山の頂点だとすると、その裾野にあるのは健康を支えるサポート産業であり、そのなかにはこうしたケアハウスなども入ってくると思う。また、栃木県のフードバレーというのは、現在どのような様子であるか。

(オブザーバー)

現在も続いている。フードバレーの「バレー」は谷という意味ではなくて、“集まっている場所”という意味である。広い場所に離れて存在していても相乗効果は生まれないので、一定の場所に、一定の理念をもって集まり、そして10年先に自分たちがどのように暮らしたいかをイメージしてストーリーを明確にして取り組むべきだ。

(委員長)

「健やかライフ」が成り立つ産業を育てなければいけない。昨日の新聞で清原工業団地の中外製薬の社長さんが「医療バレー」を提案していたこと、専門家に言わせれば、健康診断は治療医学ではなく予防医学であり、そのため日本人は長生きであるといわれている。

(オブザーバー)

フードバレーは医食同源という言葉があるように、健康を支えるためにはまず食べ物という考えに基づいているものだ。そして、下野にはいい土地がたくさんあるので、無農薬とまでは言わないまでも安心して食べられるものを作って、それを使った食事をお店で販売するなどをすればいいのでは。

(委員長)

6次産業を営む委員へこれについての意見を求めた。

(委員)

- ・商品を作って下野ブランドの認証も受けたが、それをしたことによるメリットは特にない。また、問題点として、学校給食に取り入れてほしいということをお願いしているが、各学校には契約している給食センターがあるため外部から入れることができないとの返事であった。認証受ければPRするということで受けたが、行政のバックアップもさほどないこと、現在は市の加工所を2つの団体で利用しているが、最初から使用していた団体の名前が商品に載ってしまう状態であり、それについて納得のいく回答をまだ得

られていない。

(委員長)

製菓業を営む委員へ意見を求めた。

(委員)

- ・ 10年後で一番心配なのは人材不足であり、年齢層の構成が変わったときになにをやっていくべきなのかについてもっと真剣に考えたい、雇用の創出も大事であるが、人材不足に対応するため、置き換えられるものは機械化を検討する。また、健康という意味では自社商品は添加物を可能な限り除去してつくっているの、心も体も健康になっていただきたいと思っている。

また、工業団地に廃棄物処理の工場がどんどん増えていること、とりわけ自治医大周辺に移住者が多いことに言及し、年をとったときに受け皿になれるような、地元に戻ってきてもらう、あるいは、移住してもらうような取り組みしないと人口が減ってしまう。

(委員長)

今の「健やかライフ」の関連産業で、言葉では医も食も住もケアも余暇もあるが、このあたりをもう少し具体的にふくらませるとどうなるのか。

(コンサル)

p 3の下図がそれを例示をしているものであり、青い枠の部分が、小さいけれども若い方にも興味を持ってやれるような産業、緑の枠の部分が、地元にいる建設業・不動産業が活躍できる産業をあげている。他にも産業はあるがそれは皆様がこれから工夫していくことである。

② 第5章および第6章について

(委員長)

5章の資料を見ると既にあらかたできていると感じるが、実際、計画書になった場合にはこれは文章になるのか。

(コンサル)

文章になるし資料も作る。そうであるから、計画書になる前に皆様にお諮りして、非現実的なものがあれば削除してもらったり、逆にこういうことを盛り込んでほしいというものがあれば追加していきたい。

(オブザーバー)

コーディネーターという文言があるが、誰がやってもできるというわけではなく、その人の技量によるところが大きいということに留意したほうがよい。コーディネーターやプランナーは自分で何かを作るわけではないので、資源がまずないとそれを生かすことができない。

(委員)

- ・ p 5の「(3) 地域ブランドの創出・展開」の「②着地型観光事業の展開促進」の「イ. 着地型観光事業者によるツアー集客の促進・支援」について、自治医大が薬師寺とい

う地区にあり、また、国分寺尼寺など歴史的なものが多いので、観光のPRのなかに下野の歴史をもっと積極的に盛り込めばどうか、そうすれば、自治医大を中心にこのあたりの町並みそのものが「健やかライフ」の場所だというイメージがつくのではないか。

(委員長)

地元の歴史をうまく解説して誰の目にも触れるようにしたらいいと思う、しかし、そうしたものは既にあるような気がする。

(委員)

- ・そうした名所に行けば既にあるが、もっと大きく目につきやすいPRがよい。

(事務局)

関東ふれあいの道などの歴史を結んだモデルコースがあり、要所要所に歴史を紹介する看板があること、道の駅では市全体のスポットを紹介していること、商工観光課でも観光振興計画を策定したが、そこでは周遊性をもつような、ストーリー性のあるコースをつくる予定である。

(コンサル)

ここでのコーディネーターやツアープランナーというのは公共のお金で一部やる場合もあるが、計画のイメージとしては、基本的に、「商売」をイメージしており、企業連携については、選定委員会でプレゼンをしてもらうなどして適切な人を選ぶというのも重要であるが、任期を終えたらそこで終わりなのではなく、企業が結びついたら報酬をもらうというような「産業」として成立し得るものと考えている。

(委員)

我々の業種は建設業であるが人材確保が非常に問題であり、若い人が来るような町づくりをしてほしい。また、p 3の下図はビジョンが明確であるが、我々にとっては、建設業としてどういった貢献ができるのかいまいちよくわからないので、そのあたりを考慮していただけたらありがたい。

(委員長)

取り組みについて希望はあるかと。

(委員)

今のところそういうものない。

(コンサル)

どのような仕事をされているのか。

(委員)

石油関係のメーカーで、舗装や施工を行っている。バリアフリーについては貢献できるかもしれない。

- ・下野ブランドの話だが、駅にはポスターが貼ってあってもお店にはないので、人が集まる場所にもっとあればよい。
- ・あまり現実的ではないと思うのは、5章の「(2) 新たな産業の誘致・育成」の「③田

園都市レジジャー系の産業育成・支援」の「ア. コミュニティ・ホテル、オーベルジュ等の育成」である。自治医大の周辺にはウィークリーマンションぐらいしかないので需要がないのでは。また、5章（3）の説明で言われていたバスツアーは大変いいと思う。

（コンサル）

ツアーを組むことを仕事としている人がいれば地元のをうまく結びつけて使えるようになる。下野市は産業がばらばらになっていることが多く、これを結んでいく人がはいない。そして、だからこそコーディネーターをつくることは非常に産業振興に繋がる。

また、ホテルは、自治医大からの提案であり、それは、100人規模の学会が開催されていること、最近、学会後にバンケットをやらなくなったことが背景である。そして、ホテルは行政が作るという話にはとてもならないので、そういう話があるとしたら、民間で探すということになると思う。毎日客が変わるようなホテルではなくて滞在型のホテル、すなわち自治医大にきてリハビリやトレーニングに対応するために長期滞在する利用者を含めて考えれば案外成り立つかもしれない。

（委員）

- ・ 修繕のための業者がきたときも泊まるところが限られているので、確かに困る。
- ・ 石橋警察の近くにビジネスホテルがあるが遠い。
- ・ 研修する場所も時間制限なく借りられるようにしてほしい、場所があるのに時間が限られているから使えないから不便である。
- ・ 社員で食事会ができる規模の施設、結婚式場も市内にはなく不便である。
- ・ 下野ブランドの宣伝を松本委員にも参加していただきたい。

（委員長）

この「健やかライフ」は昔言われていたロハスと同様のものか、それともロハスに変わる新しい言葉か。

（コンサル）

この計画のために作った造語であり、資料では述べていないが、ライフにはライフサイエンス（生命科学）という意味合いも込めたいと思っている。

（2） その他

- ・ 事務局が、第3回会議の開催時期について説明した。

日時：11月27日（木）の午後1時30分開始

場所：道の駅しもつけ 研修室

5 閉会 （15：45）